

## 特集「システム開発とプロジェクトマネジメント（Ⅲ）」 の発刊によせて

澤 田 啓

企業を取り巻くビジネス環境は依然厳しく、他社との競争優位性を保ち続けるためには、新しいテクノロジーに積極的に取り組み、ビジネス遂行の根幹を支えている情報システムを常に高度化させていくことが求められる。昨今では仮想化技術やクラウドコンピューティング技術といったテクノロジーを駆使し、「所有から利用」へと企業の情報システムの利用方法すらも変化している。しかしながら取り巻く環境がいかに変化しても、情報システムに求められる高い品質と、その裏付けとなる情報システム開発でのプロジェクトマネジメントや品質保証活動の重要性は、以前にも増して高まっている。

当社のシステム開発におけるプロジェクトマネジメント体系の整備は、1997年に米国ユニシス社から網羅的で完成度の高いIS (Information Services) ビジネス方法論であるTEAMmethod<sup>SM</sup>を導入し、ビジネスプロセスの基本理念と方法を確立することから始まった。翌1998年にはTEAMmethodで定義されたビジネスプロセスと関連する社内規定とを統合し、自社向けの実践手続きとしてISBP (IS ビジネス業務プロセス) の適用を開始した。さらにビジネスプロセスを補完し詳細化する手続きとして、ISEP (IS エンジニアリングプロセス)、見積プロセス、システム購買/協力会社協業プロセス、特許出願評価プロセス、情報セキュリティ関連プロセスなどの整備と定着を順次進めた。2006年からは品質保証活動を強化し、経営の観点からのビジネスの審査、ISBPを支援する品質保証レビューと現地・現物のアセスメント、システムライフサイクル全般にわたるシステム点検と障害管理の実施、より実践的なプロジェクトマネージャ育成研修コースの開催などを進めてきた。

品質保証活動は継続と改善が肝要であり、施策の浸透具合により活動内容の軸足を移してきた。今年度は、個人のスキルに依存した活動から、「見える化」によって組織内で共有し誰でもが実施できるようにする、ポータルサイトや支援ツールの整備によりプロジェクトマネジメントに関わる作業負荷を軽減する、そして品質保証活動自体の民主化と効率化を計画し実施している。

これまでのシステム開発のプロジェクトマネジメントや品質保証における当社内の主だった活動について、ユニシス技報（以降、技報）の特集号との関係を振り返ってみる。技報65号では、米国ユニシス社からTEAMmethodを導入してまさに適用を開始したいわばプロジェクトマネジメントの黎明期におけるオープンシステム開発の実例をあげ、発生した課題と解決に要した対策を示した。技報67号ではTEAMmethodをベースとしたビジネスプロセスの基本理念と方法について、標準化したプロセスの実践という視点で解説した。技報97号ではビジネスの可視化と知財活用、また技報99号ではソフトウェア品質保証といった観点からシステム開発とプロジェクトマネジメントの新たな理念やベストプラクティスを紹介した。いずれの号も読者の高い関心を得ている。

本特集号「システム開発とプロジェクトマネジメント（Ⅲ）」では、IT 業界における人材育成の状況と将来展望という主題で、プロジェクトマネジメントの中心的担い手であるプロジェクトマネージャの育成に関する現状の課題と対応施策を提示し、システム開発の品質を左右する上流工程の要件定義までのプロセスで当社製造流通事業部門を中心に活用されているBMAPROS（ビーマプロス）による業務分析およびその活用事例を紹介している。さらに先の技報67号に収録されていた論文五編について最新情報をもとに改修し、原題のまま掲載している。今後も技報を通じてシステム開発とプロジェクトマネジメントに関わる報告を随時公開する計画である。

本特集号が、システム開発およびプロジェクトマネジメントに取り組む多くの方々の一助になれば幸いである。

（品質保証部門担当 常務執行役員）